

The Danube Quarterly

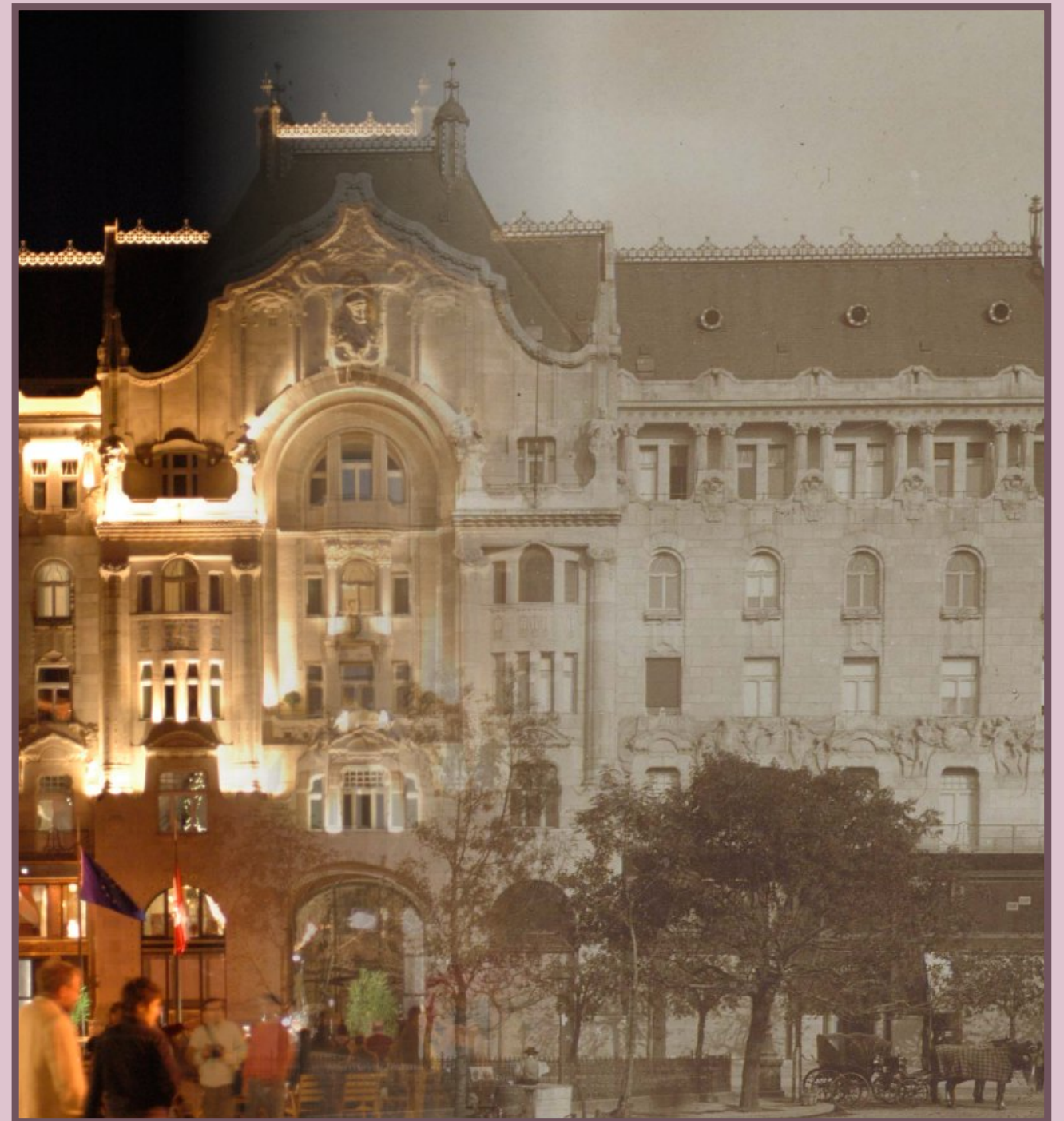
ドナウ通信



2006(平成18)年・新春号



ハンガリー日本人会会報 / The Japanese Community Bulletin



January

S	M	T	W	T	F	S
1	2	3	4	5	6	7
8	9	10	11	12	13	14
15	16	17	18	19	20	21
22	23	24	25	26	27	28
29	30	31				

February

S	M	T	W	T	F	S
			1	2	3	4
5	6	7	8	9	10	11
12	13	14	15	16	17	18
19	20	21	22	23	24	25
26	27	28				

March

S	M	T	W	T	F	S
			1	2	3	4
5	6	7	8	9	10	11
12	13	14	15	16	17	18
19	20	21	22	23	24	25
26	27	28	29	30	31	

目次

ご挨拶	伊藤 和矢	1
意見と提案 日本人会を考える	盛田 常夫	3
随想 セピアオレンジ彩との別れ	賀来 芳弘	7
ハンガリーでの生活	大島 秀之	8
創作 万引きに微笑を	岩井 孝博	12
日本人学校児童作文		
第二十六回海外子女文芸作品コンクール入選作品		
作文の部優秀賞 げんち校での思い出	加茂 篤思	14
佳作 「さようなら」なんて言いたくない	戸田 莉紗	15
俳句の部佳作	鬼丸 祐輔	17
中学部作文 堀部和加奈・小松 幹・三代鳴美・八代大成・山崎勇祐・戸田大貴		18
みどりの丘日本語補習学校 学習発表会を終えて	知念 まり	24
総会・懇親会報告	酒井由美子	26

ご挨拶

伊藤 和矢

ハンガリー日本人会の皆様、新年明けましておめでとうございます。

日本・EU市民交流年として、多くの行事で日本・ハンガリー間の市民レベルの交流が行われて参りました。二〇〇五年が暮れ、新しい年が明けました。二〇〇六年が皆様方にとりまして、希望に満ちたものとなります。ことを心より祈念致します。

昨年に引き続きまして、会長の大役を仰せつかることになりました。昨年一二月の日本人会総会でご承認頂きました新しい理事の方々の力をお借りして、本年もなんとかこの大役を果たしていきたいと考えています。

昨年を振り返ってみますと、在ハンガリー日本国大使館、国際交流基金を中心に企画・準備され、日本人

会よりも実行委員会に参加して協力してまいりました市民交流年の行事が、鬼太鼓座の一月の公演で幕を明け、秋には文楽の公演、NHK交響楽団による演奏会、富士山をテーマにした北斎、広重の浮世絵と現在の写真による展覧会など、日本の伝統芸術と文化レベルの高さを多くのハンガリーの人々にご紹介できたものと思っております。また多くの市民レベルの交流により、これまで以上にハンガリーの方々に日本のことを知って頂くとともに、私共も、ハンガリーのことを知ることができたと思っております。

四月には、待望久しいブダペスト日本人学校（正式名称「在ハンガリー日本国大使館付属ブダペスト日本人学校」）が開校致しました。新たに日本より派遣されました先生方の下で、三〇数名の生徒でスタートしました日本人学校も、昨年末には五〇

数名、本年四月には六〇数名へと、順調に発展しております。開校に向けて、また開校後の運営にご協力頂きました在ハンガリー日本国大使館、設立準備委員会、運営理事会の皆様に改めまして感謝申し上げます。また、開校に必要な多くの資金をご提供頂きました日本人会法人会員各社（商工部会加盟各社）の皆様には、経済環境が大変厳しい中、海外における日本人子弟の教育」という大局的見地からご賛同頂きましたことに、御礼申し上げます。

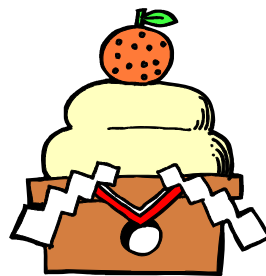
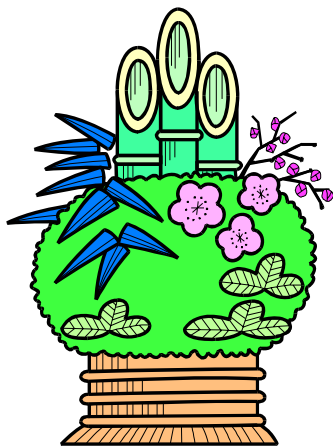
二〇〇五年は、当国に対する日本企業の投資姿勢にも変化が現れたように感じられます。新たに多くの企業が商工部会に加盟され、日本人会個人正会員にも多くの方々、ご家族をお迎えすることができました。新たな日本企業の当国への進出により、日本社会もまた変わってくると思います。昨年末、まず在留邦人

の方々への情報提供を目的として日本人会のホームページを開設することができました。今後、ハンガリー社会への情報発信なども含め、内容の充実を図って行きたいと思っています。二〇〇六年を迎え、日本人会が当国日本人社会で果たすべき役割を引き続き模索・検討していきたいと思っております。

二〇〇六年は戌年。十干と十二支による干支は「丙戌」となります。インターネットで丙戌とはどのような年かを調べて見ますと、「丙」は一人と囲いとの合字である。一は陽気を示し、陽気が囲いの中に入るのは、陰気が初めて起こって陽気が衰える兆しを表す。「戌」は茂と同義で、草木が茂る中に陽気（一）を内蔵することを示す。枝葉が茂って日当たりが悪くなるので、剪定、つまり過剰なものを除いて明るくする必要があり、とありました。丙戌の年は活

力のかげりの兆しも見られるので、無駄を省いて風通しをよくする必要があります。というこのようです。

会員皆様のご健康とご多幸を祈念致しますと共に、本年もハンガリー日本人会の活動に積極的にご参加頂きますようお願い致します。



意見と提案

日本人会を考える

― 昔、今、これから ―

盛田 常夫

ハンガリーに日本人会が組織されて、今年で四半世紀近くになる。正式な結成総会があった訳ではなく、寿司を食べる一大イベントとして、一九七九年一二月にヒルトンホテルに参集したのが、最初の集まりだと思う。この会に参加された人で、今もハンガリーに在住されているのは田路さん、飯尾さんである。その他に参加されている方があるかもしれないが、記憶が定かでない。

伊藤忠所長がデュゼルドフルから寿司屋さん呼び寄せ、大使館に電気釜を集めてご飯を炊き、てんやわんやの混乱の中で寿司大会が開かれた。

これが一二月「総会」の原型である。この出張サービスはかなり長い間、伝統的な慣習になっていて、ほんの少し前まで、一二月の「日本人会総会」は「寿司大会」と呼ばれていた。富士レストランや他の日本料理店で寿司が食べられるようになって、
「寿司大会」という名称が付けられていた。ドイツからの寿司の出前が安いはずがないし（ビジネスチケット三枚分にホテル三部屋二泊分）、寿司が食べられない時代でもないのに日本人が食べ物に拘っているようにみともないではないかという正論が通って、現在の「日本人総会・懇親会」と改称された。しかし、長年の習慣を止めるのは簡単ではなかった。日本人会理事を説得し、寿司の出前を廃止し、名称を変えるのに三年かかった。もともと、総会は形だけで、実体は懇親会という内容は変わっていない。

日本人会は商工会の親睦部

ほんの十年ほど前まで、ハンガリーに駐在している日系企業のほとんどは総合商社で、これに大使館員と僅かな留学生、それから当地に永住された数少ない日本人が、ハンガリーの日本人社会を形成していた。商工会はほとんど「商社」会だった。だから、日本人会会長は商社の所長が持ち回りで担当し、日本人会と商工会の区別は形だけのものだった。

当地の商工会は設立から現在に至るまで、対政府ロビー活動をすることなく、いわば商工会員を中心とする懇親会や補習校運営、単発行事の開催を主たる活動とするいわば内向きの組織だった。遠足会や運動会のような単発の行事は、商工会が決めたそれぞれの担当者が組織し、臨時のアルバイトの手助けをお願いする形で組織されてきた。

要するに、長い間、日本人会は商工会の親睦部で、行事ごとに商工会

以外の在留邦人にも参加を呼びかける組織だった。この性格は基本的に現在まで受け継がれている。

在留邦人社会の変化

一九九〇年代の半ばから、ハンガリーに進出する製造会社が増え、逆に商社は撤退あるいは縮小を余儀なくされた。その結果、商工会では製造業の会社の数が多数を占めるようになった。また、体制転換によって国が開放されたことで、ハンガリーに留学したり、定住したりする日本人が増え、さらには個人事業者によるビジネス開業によって、当地に在留する日本人の構成はきわめて多様になった。補習校の規模も大きくなり、進出企業の子弟のみならず、国際結婚で誕生した日系二世の子供が増えてきた。

こうした変化の中で、二〇〇五年に日本人学校が設立され、他方で新

たな補習校が設立された。子供たちの教育に二種類の学校ができることはある意味で不可避なことである。進出企業の子弟の多くは日本へ帰ることを前提しているから、日本のレベルに合った学校教育が保証されなければならぬ。したがって、日本人学校は必然的に「商工会子弟学校」になる。他方、当地に定住する日系二世の子供の場合、ハンガリーで生活することを前提する限り、ハンガリー語を主たる言葉として生きていく以外に方法がない。日系二世として生きることが一つの特殊なアイデンティティを与えることになる。ハンガリー語と日本語を自由に操る子供たちが増えれば、ハンガリーにおける日本人のイメージやプレゼンスが豊かになっていく。日系企業にとっても、日系二世の能力をいかに活用するかは、当地での事業成功に大きな意味をもっている。日本の国際化はまさにこの日系二世の活躍にか

かっていると言っても良い。

日本人会を構成するのは商工会に属している企業派遣の家族だけではない。当地に留学したり定住したりしている日本人家族もまた重要な構成員である。日本人学校が商工会子弟にとって不可欠のように、日系二世の子弟に補習校は不可欠の学校である。ところが、日本人会がその組織規約の中で日本人学校への支援のみを記し、補習校支援を明記しないのは片手落ちである。日本人会を商工会に従属させているという批判を免れないだろう。

形式と実態の矛盾（下部組織が上部組織を支配する）

数年前に日本人会と商工会を一つの法人組織として合法化することになった。活動規模が大きくなってきたことの結果である。しかし、逆に組織の矛盾が明々白々になった。というのは、形式的には商工会は日本

人会組織の一部になっているが、実態は商工会が日本人会のすべてを決定するという慣行になっている。形式と実態が完全に矛盾している。

ただ、この種の矛盾は多くの社会組織に存在する。旧社会主義国家の体制の本質的矛盾は、まさにこれだった。共産党は国家の一部なのに、部分であるはずの政党が国家全体を支配していた。それが独裁政治を生んだ。

それを良いとか悪いとかと判定しようというのではない。なぜそうなるのかを考えてみたい。一言でいえば、便宜主義。そうすることが簡単で都合が良いからに他ならない。しかし、そこから組織の腐敗や墮落あるいは組織の形骸化が始まる。これは社会の普遍的な法則である。

ハンガリーに在留する日本人の集まりである日本人会が、実質的に商工会親睦部になり、日本人会の発議で設立した建前になっている日本人

学校が商工会子弟学校になってしまふのは止む得ない事情もある。だからと言って、これをそのまま容認したのでは身も蓋もない。ある程度のけじめをつけていかないと、商工会家族でなければ日本人会員にあらざという商工会の傲慢に陥りやすい。商工会は加盟企業の組織だが、日本人会は当地に居住する日本人個人を基本とする組織だから、便宜主義的に商工会がすべてを取り仕切れば、組織運営の恣意性にたいする当然の批判を受けよう。日本人会の組織・運営は、当地に在住する日本人が平等に加わっていけるものなければならぬ。これを見れば、日本人会としての組織は名と実が異なるものになる。

相互自立が望ましい

日本人学校が設立されて、商工会の役割分担から学校運営の仕事が切り離されたように、日本人会の活動

と商工会の活動を相互に切り離すことが、それぞれの組織の発展にとって望ましいし、あるべき姿である。

商工会はもっと日常の企業活動に関連する諸問題に取り組み、対政府交渉に力を入れれば良い。日本人会は個人をベースとする組織として、当地に長く在住する人々の力を借りて、当地での生活の不便さを改善したり、趣味を生かしたりできるようにさまざまな情報・サービス提供や行事を行って行けば良い。もちろん、それぞれの行事の実行には、個人だけでなく、会社単位で協力することがあっても、組織の目的や運営の原則をきちんと確立するのが良い。そうすること、それぞれの組織がそれぞれの目的をより効率的に達成することが出来るはずだ。

仕事で忙しいお父さん方が、会社の仕事、商工会の仕事、学校の仕事、日本人会の仕事をすべてやる必要がどこにあるのか。商工会は担当幹事

に任せ、学校は理事会と専属教員に任せ、日本人会は個人の趣味と能力に合わせて役割が分担できるようにすれば良い。

ところが、今年度の役員構成はこれとまったく逆行している。商工会役員が日本人会役員を兼ねるという便宜主義をとっている。商工会の幹事の仕事だけでも負担が多いと不満が聞かれるのに、日本人会の役員をも兼ねるといふのはどういふことだろうか。名前だけの役員であれば、日本人会の活動が改善されることは期待できない。良く考え抜かれた決定だとは思われない。

日本人会事務所の役割

日本人会には立派な事務所があり、専任職員がいる。この組織資源を利用するとすれば、単発の行事から日常的な情報・サービス提供へと、組織の活動内容を変える必要がある。そうでなければ、大きな事務所や専

任職員を抱える合理的な理由がない。

ではどのように変えていくべきか。当地の日本人の生活に欠かせない情報やサービスを発信・提供することである。そのために、在留邦人のいろいろなグループが必要としている情報をHPで随時提供することが不可欠である。また、ハンガリー社会にたいする対外的な情報発信も必要である。この情報の日々更新を日常的な業務にするのであれば、組織として専任職員を抱える意味がある。また、事務所を有効利用するために、図書・雑誌の整備、日本語インターネット・サービスの提供、事務所の部屋利用サービスの提供（無料・有料）、各種情報媒介サービス（日本人相互の情報交換・商品情報・イヴェント情報・不動産情報）を積極的に発案し実行する工夫が必要である。これらのサービス提供は専任の職員に頼らざるを得ないし、ハンガリー語を母語とする職員の採用も必要に

なる。

独立事務所と専任職員を抱えれば、会社の経営と同じように、これを管理運営する体制が必要になる。この管理運営責任を果たせる体制をしっかりと確立することも重要である。

組織のあり方

こういう方向に転換していくとすれば、現在のように商工会役員が日本人会役員を兼ねているような便宜主義では覚束ない。もっと自由に、発想豊かに動ける人に、日本人会の組織を任せることが必要になる。日本人会の役員を商工会で決めたり、日本人会の議論を商工会例会の終了後に短時間で済ませたりするやり方では、組織は形骸化し、日本人会は組織として機能しない。商工会員以外の多くの人々に日本人会の役員の仕事を担ってもらい、日常的に活動の内容を把握する体制を作ることが必要である。

随想

セピアオレンジ彩いろとの別れ

賀来 芳弘

とうとうブダペストを去る日が目の前に迫ってきた。楽しかった思い出だけを胸の奥にしまつて帰ろうと思う。

ウィーンの街並みが色彩色とするならば、モノクロの街に近いと自分の中では感じていた。二〇〇〇年の寒さが本格的になりはじめた秋、それが私の二度目の海外生活のスタートである。新たに製造会社の設立登記、土地の購入、工場建設、従業員の採用、設備導入、教育等々と生産、毎日が見知らぬ国での戦いであつた。

その中で心安らかにしてくれたのは音楽文化との出会いである。その頃からブダペストの街並みは、モノクロからセピアオレンジ彩へと変わ

っていった。夜の街並みを美しく仕上げる街灯とライトアップ。オレンジ彩だけでは明るすぎる。歴史がある分だけセピア色を感じる。

音楽文化は実に私の心をわくわくさせてくれた。クラシック音楽コンサート、バレーに行くたびに音楽を楽しんだ。かしこまって音楽を楽しんだのではない。二〇〇五年三月に新設された国立コンサートホールで行なわれた五嶋みどりのシベリウス作曲バイオリン協奏曲は、弾きはじめての十分間は鳥肌が立っていた。もともとクラシック音楽に興味があつたわけではない。五嶋みどりのテレビ番組のビデオを借りて、彼女の演奏するバイオリンの繊細だが強い音に惹かれた。オーケストラの楽しみは音の複雑性である。全ての楽器の音が組み合わさって情景が生まれる。ある人が小澤征爾の音は体にまわりつくと言ったが、一度だけ背中の方から聞こえた音にふと振り返って

しまったことがある。

指揮者小林研一郎氏との出会いも私にとつては生涯忘れえぬできごとである。身近で感じる氏の音に対する感性の素晴らしさは到底書き尽せるものではない。また、譜面台を置かないというマエストロの生き方は若い音楽家にとつては何にも換え難い教訓であつた。

稲川大使など関係者のはからいで、ホームコンサートに、二度お越しいただいた。指導は譜面を見ないことから始まる。暗譜ができていないことは弾き込んでいない、感性を議論する以前の課題であつた。この時を境にホームコンサートでは譜面が消え始めた。そしてブダペスト在住の若い日本人演奏家が世界各地のコンサートで賞を拝受しはじめた。目に見えて進歩の跡がわかるようになってきた。我々聴衆にとつてはうれしい限りである。

最後の贈り物は、五年に一度ワル

シヤワで開催されるショパンコンクールに行くことができたことである。

多くの日本人の若者達が参加し、結果として日本人は四位に二名入賞を果たした。優勝はポーランド人であった。ショパンが得意とする線香花火のごくごく小さな火玉をちりばめたような音を躍動的に、かつ淡々と弾く姿はいにしえのショパンを垣間見るようであった。

そして、この素晴らしい思い出は多くのよき友人、若い才能ある演奏家、その人たちをやさしく包んでくれている在住の方々がいたからにはかならない。知り合えたことで私の人生に新たな一ページを書き加えることが出来たことを感謝したい。セピアオレンジ彩はもうモノクロには戻らない。



ハンガリーでの生活

大島 秀之

「今度の休み何処か行くの？」

「別に考えてないけど」

我が家のちよつとした会話である。

「海外旅行とか行かないの？」

「特には：」

もつとも海外旅行とは、言わないかもしれないが。

四月に来洪し、はや九か月になる。ハンガリーでの生活にも少しは慣れてきたところである。これから他の外国に行き、慣れない土地での観光も素晴らしいと思うが、何となく魅力を感じなかったのである。海外旅行ならいつでも行ける。しかし、外国に住むことは、なかなかで出来る事ではない。今の生活をもっと充実させていきたい。そんな思いの方が強かったのである。

ハンガリーでの生活は、予想とは全く違っていた。こちらに来る前は、東欧で、物資も少なく、治安のことも心配していた。しかし、実際に訪れてみると、ブダペストの街はかなり近代化が進んでおり、それに歴史的に価値の高い建造物が、実にうまく調和している。まさに、「ドナウの真珠」といわれるのにふさわしいと感じた。また、ハンガリーの人々は、大変親切で、道などを訪ねた際には、直接目的の地まで、連れて行って頂いたことが何度もあった。バスでは、停留所から離れていても、運転手さんが気がつけばバスを止めて乗せてくれる。日本では考えられないことで、何度もビックリさせられてしまった。また、バスの中では、お年寄りに自然に席を譲る習慣が身についており、まったく感心させられる。そんなハンガリーでの生活だが、大きな課題がある。それは、「言葉の壁」である。ある程度は予想を

していたが、実際は予想以上であった。相手に伝えたい事がうまく伝えられないもどかしさ。日本では、何でもないことが、とても大変なことになってくる。電話一本かけられない自分が情けなく思えた。思い切って語学学校へ通った。そこでは、ドイツ人、フランス人、イラン人などの様々な外国人がハンガリー語を学んでいる。そして、お互いの会話には、英語を用いている。英語があまり得意でない私は、そこでも絶句してしまった。みんな気楽にジョークを言い合い、会話を楽しんでいる。私はというと、聞くことだけで精一杯で、急に質問されても、なかなかうまく答えられない状態であった。しかし、皆、言葉が通じなくても暖かく接してくれ、大変励まされていた。

さて、日本人学校は、二〇〇五年の四月に開校した。ブダペストには、二十九年前から補習校があり、二〇

〇五年の三月に閉校し、その歴史を閉じた。それを引き継ぐ形での開校で、新設校でありながら今までの伝統も存在していた。今までの良き伝統を残しながら、新しい校風を感じてもらえるように職員が一丸になり、走り続けてきた。ハンガリーに長く住んでいる現地の先生、日本の小学校や中学校に勤めていた先生達のこれまでの教育経験をうまく融合しながら、それぞれの良さを生かしていくことに力を注いだ。遠足、夏期合宿、運動会、文化祭等の学校行事の成功や毎日の授業での学習効果。日本人学校の一年目は順調に進んでいる。

特に、少人数の特性をふるに生かした、一人一人の個に応ずる授業は、他の海外施設はもちろん、日本の小中学校と比較しても、誇れるような素晴らしい内容と質の高さだと自負している。

二〇〇六年度、日本人学校は、二

年目を迎える。何事も初年度がもちろん大切だが、二年目はさらに重要である。今年走り始めた日本人学校が、いかに保護者や地域の人達の信頼を得ることが出来るかが勝負となる。毎日の授業の充実、特色ある教育活動、一人一人の個性を生かす学校行事、児童生徒会の活性化等、今年以上の成果を期待されている。そんな期待にいかに対応していくか。これが私の二年目に向けた課題である。



万引きに微笑を

岩井 孝博

テンテン・コロリン・チントンシヤン。

お囃子におだてられ、シヤシヤリ出てまいりました。

有り難う御座います。

エー、このオー、なんていいですか、なんともバツの悪い事つてエーのがあるもんです。

泥棒を捕らえてみれば、我が子なり。そうかと思うと、泥棒とでーくっ気エなんざ、誰でも持つてる、なんて、褒められてんだか、叱られてんだか、よく解らない事も言われます。

ガム公とグミ助、そしてチョコ坊の三人が、例によって、なんだかんだと騒ぎながらも、予定エー四週間

の第一日目、ロンドンの町中に来ました。

そこはリージェント・ストリート。

繁華街で御座います。

「なんだいなんだい、げー国つてエーから、どうかと思つてたら、東京とかわんネーな」

「あら、ね、あたいを見てさ、い

いお兄さんが、ウインクしてるよ」

「なア、ガム兄イー、ぷりッとし

た子が一寸目線が会うと、なんだつてニコッてすんだイ、気があるつてエー事かい」

「おらおらチョコ坊、そんなクネッとしてんじやないよ、グミ助まで、

そうするシトてエーナア、エゲレス人じやねエーんだ」

「なにじんだあ」

「げーじんだ色ンんなな、ここのシトなんザ、声かけたつて、知らん

顔だ。よっぼどじやねエーと、話も

できやしねエー」

「へえー、そんなもんかい」

なアーんて、感心しながらも、どつかで買い物したいってんで、三人してその辺の店に入りました。

「へえー、なんとなく、やつとゲ

エー国つて感じだな」

「なんでだ」

「ダアーて、見てみろよ、日本語なんてねエー、値札だって、ポンド

で書いてらアー」

おかしな感心もありまして、あち

こちと見ているうちに、チョコ坊が、店の中で口をぽかんと開けて、乳母

車を押してる女のシトを見ています。

「どしたい」

「あれみてる」

「なんだ、あれか」

「そう」

「なんか、珍しいか」

「やつてる・・・」

「なにを・・・」

あ、お、おおおー。

「上手めエーモンだなあー」

それもそのはずでして、万引きを

してたんですから。

これが又上手いモンでして、沢山な衣類を乳母車に乗つけ、コレツと言うのを、赤ん坊の背に、ぐっと押し込で隠し、残りを元の所にさつさと返す。

で、乳母車を押しながら外へ出る。

ズーズーしいとは言いながら、何ともはや、ロアングリ。

万引きに微笑を、何てこと言ったりしたしにや、皆様方から後ろ指刺され組にされかねませんが、

「な、あれ、知らせた方、いんじやねエーかあ」

「ばか、よせ」

「なんでだい」

「そうよ、どうしてさ」

チョコ坊とグミ助に、しよがねえーなどガム公が言います。

「いいか、お目えー達が見た見たって騒いでもだ、見たって証拠がねえー、ねエーだろ。あの女をとつ掴めエーてせめたところで、やってね

えーとなって、仕舞いにやな、あの女から、人権踏みにじられたアー、なんて騒がれでもしてみろ。手が後ろに回るんだ。こつちが。だから、ほつとけ、いい子ぶるんジャねエー」

「よく、こんなのほつといて店やつてられんなアー」

「保険があらアー」
「じゃ、なにかい、あのシトツて、グルなの」とチョコ坊が呆れて言います。

「んなことも、無エーだろ」

三人で、街を見ながら歩いていると、チョコ坊が又

「どうしてこの町の道つてさ、カーブしてるのよ」

「そう言われてみると、ガム兄イー、なんか訳でもアンのか」

「ある」

「どんな」

「馬てなアー、まっつぐに走んのがな、苦手なんだ。カーブしてる道つてのは、馬の道つてこった」

「んな事言つたつて、馬なんていやしねエーじゃねエーか」

「昔の話だ」

「なんだい人と馬ア一緒か」

「そうよねエー、まっつぐにすりやいいのに」

「ジンがねエーからな、仕方ねエーさ」

「あーそうなの、自信が無いから無愛想にもなんのかね」

「え、おい、何言つてんだ。チョコ坊、あのな、じしんはジンでも、その自信じゃなくて、こつちの地震で、そつちの自信じゃ無エー」なんて、ガム公が体を上下に揺すったりする。

「え、こつちの自信じゃなくつて、そつちの地震つて、ないの地震、ここニヤ」

「ない」

「本とかヨォー」

「ああ、ない」

「でさ、無いと、どうして道がカ

ーブするわけ」

「だからさ、昔のマンマがそのまんまって事だよ、ツたく、ああ俺、いやンなった」

とうとうガム公がさじイー投げてしまいました、が、チョコ坊とグミ助は相変わらず、アアでもない、こうでもないとやっています。

それでも、せっかく来たかと思えば、あっちへ行ったり、向こうへ行ったりとしてみますが、五日もするてエーと飽きがきて

「せっかくだ、他の国イ、行ってみたいな」なんて事になります。

「ねね、ガムちゃんの居る国、どこだっけ」なんて、しゃらつとチョコ坊が言い出すと、

「そうだよ、行けないのか、ガム兄イー」

ハンガリーにも、コラ、オーシャンにイケア、テスコ等大手のスーパーマーケットがあちこちで開店し、連日盛況。

シト皮むけて、自由競争の出来る経済が定着した証拠なのでしょう。

あれこれ、買いたいものが沢山で、ワクワクと、今日は何処へ行こうかと、お出かけも楽しいさて三人、形に残るものはどうも、と言うのも、限りある滞在で、やがて日本に帰るわけですから、余分な荷物は持ちたくない。だからイケアには行けませんが、地元の中央マーケットや中華のマーケットにはよく行きます。

忙しい店でも、暇な店でも、見かけるのは万引き、CDのケースを壊して中身だけ持っていく。サングラスの値札をはずし、顔に掛けたまま店を出る。日曜大工コーナーで、ペンチもカッターもそれぞれに値段は付いているのに、工具を工具箱に入れ、工具箱の代金だけ払って出て行く。ショッピングカートの中に、一束のねぎを残し、会計を済ませたものと混ぜて出る。

中にわぁーこのオ、かなり凄いシ

トもいまして、棚から取ったワインをラッパ飲みしながら、出て行ったりする。

そうかと思うと、パンを袋に入れ、そのまんま鳥モモを焼いている売り場へ行つて買い、そこで食べちゃう。そばにはご丁寧にも手を洗う水道とテーブルがあり、ナプキンまでもあります。

それにしてもパンと肉だけじゃ、言ってる間に、あっさり飲み物売り場から持ってきて飲み、空になった入れ物はポイと手近にあるゴミ箱に捨てて終わり。

始め、ああパンは只なんだ、とグミ助とチョコ坊は思いましたが、パン売り場を覗くと、一個十とか、二十フオリントと値段が付いている。度胸がいいのか、ズーズーしいのか、生活の知恵なのか、おかしくなっています。

「ここつてさ、腹が減ったら、おいでつて店なの・・・ね、ンなこと

もないと・・・ガ・・・何、ニヤニヤしてんのよ」とチョコ坊がガム公に話しかけてんですが、呆れ顔に首イしねって、グミ助ン所に行っちゃいました。

ガム公はガム公で、これがまた、遠い昔の万引きを思い出していました。

ガム公小学五年の秋祭り、村の神社の境内に、夜店屋台が並び、祭り騒ぎの真っ最中で、うろうろ覗いている内に、どうにも欲しい玩具があった。

家が貧乏でお金が無い。

番をしている子は見覚えのある後輩、弟の同級生。

後ろを向いた時か、よそ見している時か、と狙ってるが、いつこつちを向くか分らない。ドキドキしながら小心なりに、その子をジーっと見つめて考える。やがて、こー、向こうも気が付いて、こつちを見る。

目と目が合って、二人にあたりは

見えなくなった時、ガム公の手がスーっと玩具に行って、ポケットに入れた。成功したわけですが、それから数日後、その後輩からの手紙を、弟が持って来ました。

「あんなに見つめられたの、初めてです・・・」から始まる告白めいたラブレターに、エッ、どうして。遠い昔の事とて、ごめん、っていうも仕方ないのですが、まあ、なんとも、こそばゆいながらも、バツの悪いもんです。やれやれ、思いで肴に、イッパイやるかァー。

アラ・ドッコイ。



日本人学校児童作文

第二十六回海外子女

文芸作品コンクール入選作品

作文の部 優秀賞

げんち校での思い出

小三 加茂 篤思

「え、分らないよう」
ハンガリーの学校に入学して一日目、ダニーが何か話しかけてきました。ぼくも、答えました。

「Nem ertem」

ダニーも分ってくれたようです。

ぼくは、ほっとしました。

そして、休み時間になりました。ぼくは、友だちがいないので、ひとりぼっちでした。下ばかり見ているうちに、だんだんなみだ目になってきました。

その時、ダニーが話しかけてきました。

「Nem leszunk barátok?」(友だちになるうか)

「Igen」(うん)

その時から、ぼくとダニーは友だちになりました。ダニーの友だちのヨージやゾリとも、休み時間に鬼ごっこやかくれんぼをしました。

でも、さいしょの一年はとてもくろうしました。毎日お父さんと学校に行きました。毎朝学校の階だんのまどから、お父さんが見えなくなるまで手をふりました。朝になるとおながかいたくなつて学校を休んだ日もあったし、一週間が一ヶ月ぐらい長かんじました。

そして二年生になったころやっとハンガリー語が分つてきました。友だちともペラペラと話せるようになりました。そのころは、たん生会によばれたり、よんだりしました。おたがい楽しい時間をすごしました。

ある日、

「篤思は四月から日本人学校に入学するんだよ」

とお父さんが言いました。

「えっ」

とぼくは答えました。せっかく友だちになれたのにかわかれしなければなりません。

あつという間におわかれの日がやってきました。おわかれ会の時、ダニーからは、

「おまえがいないと、勉強が分かんなくなるよ」

と言われました。その後、校長先生からは、

「この学校に帰ってきたければいつでもいいよ。今までよくがんばったね」

とほめられました。そんなにぼくががんばったんだなあと思い、うれしくなりました。

とうとう日本人学校に入学しました。日本人学校は小さいけれど、勉

強は分かりやすいし、休み時間も楽しいので、とてもおもしろい学校です。日本人学校は今まで通ったげんち校と同じしきちなので、休み時間にダニーとも遊べます。

日本人学校は楽しいけれど、げんち校での思い出も一生わすれません。



作文の部 佳作

「きようなら」なんて言いたくない

小四 戸田 莉紗

「ねえ、まだ着かない」

私はつかれきった声で母に聞いた。

今私はひこう機に乗っている。

二ヶ月前の夕飯の時、父は気軽に言った。

「ハンガリーへの転勤が決まったぞ」

私は頭の中が真っ白になった。あんなに仲の良かった友だちとはなればなれになるなんて。しかもそんな重大なことを気軽に言うなんて。私は父を思いつきりにらんだ。少し前までは、外国へ行ってみたいなあと思っていたが、いざそうなると、やはり悲しい。

翌日の夕飯の時、転勤の話でもちきりだった。私は、もう父が話していることなんて、聞きたくもなかった。

た。私が夕飯を食べ終わろうとした時、母が私に声をかけた。

「あつそうだ。ほかの子たちに転勤のこと言っていないよね」

「え。なんで」

と言う私に母は答えた。

「いいから言わないようにね」

それが母の答えだった。私はふしぎに思いながらも、食器をかたづけた。

三週間後、私は転校するという事をだまっていられなくなつて、ようち園に入る前からの親友の一人に、学校の帰り道で教えてしまった。私がそれを言った時、親友はちがう子の事を言っていると思つて、

「ああ、それなら知ってるよ」

と答えた。そうではなくて、私が転校するといった時は、おどろいて言葉も出なかったほどだ。その数週間後、他の子たちにもほう告したら、その子たちもおどろいていた。

二週間後、私のクラスの人たちは私のお別れパーティーをしてくれた。

しばらくして、夏休みが始まった。それは日本で最後の夏休みだった。

夏休みが始まったばかりの時は、ひっこしのじゅんぴで目が回るぐらいいいそがしかった。ひっこしのじゅんぴを始めてから四日後やっとよゆうができたので、次の日、友だちからさそわれて、学校のプールへ行くことができた。その後、とくべつに同じマンションに住んでいる友だちがお別れ会をしてくれた。

やっとひっこしのじゅんぴが整って、ひっこしの日が来た。外へ出たら、親友や、同じマンションに住んでいる同級生が待っていてくれた。ちゅう車場までいっしょにおりて行って、車に乗ろうとした時、私は言った。

『さようなら』なんて、一生会えないように悲しいから、『またね』って言おうか」

「うん、じゃあ、またね」

「うん、またね」

その言葉を言った時、悲しみがこみあげてきた。みんなに「またね」と言った後、車に乗りこんだ。私は心の中で「またね」とマンションに言った。ずっといっしょにいたかった。本当は、ずっといっしょに笑っていたかった。

「何回聞いたら分かるの。まだ後十時間半もあるよ」

母が答えた。まだ十時間半もあるから、私はずっと英語を見たりゲーム、読書などをして時間をつぶしていた。それ以外はねているか、おかしやご飯をなどを食べていた。ひこう機で外を見ていた時に一番おどろいたことは、日本を出発する時は夕方だったのに、ハンガリーに着いた時も夕方だったことだ。ハンガリーへ着いて、家に着いた時、私はとても広い家だなあ、と思った。自分が小さく感じた。

楽しかったハンガリーでの夏休みが終わって、アメリカンスクールで

の生活が始まった。

アメリカンスクールに着いた時、心ぞうが飛び出しそうなほどドキドキしていた。アメリカンスクールへ入った時、ドキドキしていた心ぞうが止まるかと思ったほどびっくりした。なぜなら、そのアメリカンスクールは、日本の学校とくらべものにならないほど大きかったからだ。私は一度だけ母にここがクラスだよと教室の場所を夏休み中に教えてもらったが、行き方がちがうので、迷ってしまった。前にいた日本人の一年生たちの後をついて行ったら、自分でもどうやって行ったか分からないがいつの間にか着いていた。クラスの中に入った時、男の先生が待っていた。名前は母から聞いていたので、ロンという先生だとは分かったが、名字が分からなかったからちよつとまどった。

「ハーイ」

先生がやさしそうに話しかけてくれ

た。

「ハロー」

私は先生になんとやっていいのかわからなかったから、シャボン玉がはじけるような小さな小さな声で答えた。私が知っている言葉は、「ハロー」と「イエス」、「ノー」、「センキュー」、「ソーリー」だけだ。私は外へ行き、一人でアスレチックで遊んでいた。十五分後ベルが鳴った。私はたんにんの先生についてクラスへもどった。授業が始まってからは、意味が分からなかったので首をたてにふってばかりいた。

そんな日が何日か続き、二ヶ月後たったところ、もうだいたい先生が言っていることが分かってきた。それはすべて ESL のおかげだと私は思う。ESL は英語のできない人たちのためのクラスだ。

一年がすぎ、私はもう三年生になるうとしていた。三年生になるとナヂコバチの校しやへ通うことになる。

終業式の日、私は家へ帰る前に、先生とアメリカンスクールに

「またね」

と言った。

そして新校しやでの生活が始まった。私のクラスは、三Mというクラスだ。先生は、ミス・マイヤーとミス・チャンポリンの二人だ。二人ともとてもやさしい人だ。そんなちょうどで三年生での日々を終えようとしていた。アメリカンスクール最終日の帰る時に、先生たちや友だちに、「またね。また会えるのを楽しみにしているよ」

と私は一人ひとりに言った。

日本人学校での初日はつかれたが、楽しい一日をすごせたと思う。

そして今、私はこの作文を書いている。ふり返ると、別れや出会いはとても大切なことだと思う。なぜなら、別れは自分を強くしてくれるし、出会いはまた新しい人生を見つけられるからだ。別れもあれば出会いも

ある。そして出会いもあれば別れもある。

別れの言葉は「さようなら」だけれども、私は「さようなら」とは言わない。「また会おうね」という言葉とともに大きく成長した私と友人たちとの出会いを信じて強く生きていく。

俳句の部 佳作

小三 鬼丸 祐輔

夏のドナウ ゴールめざして

カヌーこぐ



ヨーヨーつり

中一 堀部 和加奈

「ぼくやりたい」とワークショップ
開店前から、一、二年生たちが、言
っていました。プールのまわりで、
一、二年生たちは、

「ぼくこの色」

「私は、これがいいな」

などと言いつ合っている。開店十分前

なのに、その子たちは、

「もうやってもいい」

「いつになったらやっていい」

など毎分ごとにそんなことを繰り返
し言っていました。私は、みんなそ
こまでやりたいと言ってくれるとは、
ぜんぜん思っていました。私は、
みんなの言葉を聞いて、小さな
微笑みを浮かべました。ワークシ
ョップが開店すると、みんなが、

「つるものちようだい」

と言いはじめました。私は、みんな
に渡すだけで、精一杯なのでお父さ
んにも手伝ってもらっていました。

ヨーヨーが全部なくなったのは、
結局ワークショップ開店から一時間
半ぐらいたってからでした。だから、
私は、あまり他のワークショップを
見ることが出来ませんでした。でも、
ヨーヨーが全部なくなった時は、ホ
ッとなりました。

ドナウ祭を終えて

中一 小松 幹

十一月十三日、日曜日に日本人学
校初めての文化祭をやった。不安と
楽しみが半分ずつあった。

中学部の劇は「ちびまるこちゃん」
だった。一年、二年、三年……どん
どん順番が迫ってくる。緊張はして
いなかった。中学部の劇「ちびまる

こちゃん」はすぐに終わった。

次は、全校音楽だ。声は出せた。
アルトリコーダーでは、一つだけ音
程が狂うところがあったが何とか大
丈夫だった。午前の部がすごく短く
感じた。午後の部はワークショプだ。
中学一年は「日本の祭り」というイ
メージで店を出した。自分は「生き
物釣り」をやった。結構客が入った。

文化祭の名前、「ドナウ祭」は、み
んなの協力があつてできた名前だっ
た。三年生以上の人に投票してもら
いこの名前が決まった。「ドナウ祭」
の始まる前は、みんな忙しかった。
役割を決める時、司会、進行に入
った。「ドナウ祭」の流れを左右する
大事な役目だったけど何とか大丈夫
で無事「ドナウ祭」が終わった。



ドナウ祭そして私

中二 三代 鳴美

「文化祭の名前はドナウ祭です」。この言葉から私たち、生徒会の動きは始まった。生徒の集まりは、ほぼ毎日あった。そして当然、生徒会長を決めることになり、私たち中二が立候補し、忙しさはヒートアップしていた。私の心の中では自分は生徒会長にならない、というよりなれないと思っていた。それが先生の一言によって変わってしまった。

「生徒会長は三代鳴美さんです」あっけにと取られてしまった。しかし、私にはどうしようもないこと。私自身生徒会長をうまくやっていけるかなんて、自分にはまだわからないので不安に思った。

そして私のもう一つの仕事は垂れ幕作りだった。私は自分の案が入るたびにうれしかった。それは初めての文化祭の垂れ幕がこれから残さ

れていくと聞いたからだ。そして、児童一人ひとりの手形が垂れ幕に押されるに連れ出来上がりが近づいていく喜び。珍道中だけれど面白いそんな作業が楽しかった。休憩時間を使って色を塗り、出来上がるまでうまくいくかは心配なところだったけれど、私一人ひとりの思いを垂れ幕に託せたと思う。この達成感はきつと忘れないだろう。

文化祭が近づくにつれて生徒会の中でいろいろなことが決まっていた。私は生徒会長として初めての仕事となった挨拶を必死で覚えていた。文化祭前日も、国語の宿題だった「枕草子」の暗唱をしながら、文化祭の挨拶の練習もした。

文化祭当日。私は朝から挨拶だけを考えていたかもしれない。私は暗記するのは得意でもないし、今まで挨拶で成功したと感じたことは一度もなかった。登校のバスの中でも必死に暗記を試みた。挨拶は一分もな

いはずだが、私を選んでくれた人たちが安心できるような生徒会長になりたかった。結局内容は忘れた部分があり、言おうと思っていた言葉が出たりと大変だったが、自分なりに良くできたと思っている。

私は楽しい日本人学校そして協力のできる日本人学校にしたいという目標がある。今回の文化祭ではその大きな一歩を踏み出せたと思う。児童会では一人ひとりが個性を出しながら、学年も関係なく作業を進めた。小学部と中学部は同じ校舎にいたとしてもなかなか一緒に行動することは無いので、文化祭によって全員が打ち解けることができたと思う。

これから行事を通して、児童生徒が誇りに思えるような学校になればいいと思う。



ドノウ祭にかける思い

中二 八代 大成

今回の文化祭で僕が一番貢献した活動は、垂れ幕作りです。このブダペスト日本人学校は、今年開校したばかりで、第一回の文化祭は肝心な行事だと思って、僕なりに真剣に考えて下書きからイメージしました。出来上がった後に見返すと背景と文字の配色が重なっていたりして、結局三回ほどやり直しました。

学校では主軸となる生徒会のメンバーが集まって、下書きのイメージから名前まで全て決めていきました。結果的に下書きとして僕のイメージが採用され文化祭の名前もドノウ祭と決まり、僕にかなり大変な役が回ってきました。

やはり人数が少なく、それに時間がないという状態からのスタートだったので、下書きは無謀を承知でフリーハンドでかきました。実際に

やってみると案外簡単で十五分ぐらいで済みました。背景などを実際に見てみると小さな紙に描いたときと違って、左寄りになっているのが分かりました。色塗りの段階に入ると、他の人たちからも手形や指紋を使って、日本人学校の生徒、先生全員が参加できるといいと思うという案が入ったりしてどんどんすばらしくなっていました。配色も、グラデーションを使うことになったりしていき、大変なこともありましたが、幸い我が学校にはグラデーションの匠と呼ばれる方がおられたのでとてもきれいな仕上がりとなりました。

製作の間も何度か他の学年の人們が手伝ってくれて、学校全体で一つのものを作っていくということの気持ちよさと、出来上がったときのなんともいえないすがすがしさを感じることができました。完成したときは、一億個のジグソーパズ

ルを完成させた以上の達成感と、垂れ幕が放つ温かい光に包まれ、非常に不思議な気持ちになりました。

日本では学校ぐるみで何か一つの物を作るということは絶対にないし、万が一そんな事があったとしても、自分にスポットライトが当たることはないの、自らが活動の中心となった今回の垂れ幕作りは、たぶん今のところ僕の心の中で一番新鮮な体験となっています。この体験を通して、僕は仲間というものの大切さを改めて知った気がします。これから日本に帰り、高校、大学、会社とどんどん大人になっていく中で、絶対に一人、できれば二人くらい心の心から打ち解け合える仲間を持ちたいと思います。



大事な事とは……

中二 戸田 大貴

「当たたりー」。僕がそう言うのと、拍手する人が増え、拍手喝采になった。当選者は少々照れ気味に串を振った。誰だって当たったらそれなりの快感があり、嬉しいものなのだろう。しかし、そんな喜びを提供するまでには、長い道のりがあった。僕は十一月十三日と言う日のために今まで以上にがんばってきた……この話に到るまでの話の始まりは、一ヶ月前にさかのぼる。

テーマ。それが問題であった。今まではただ食べものを作って、食べてもらえばそれで良かった。しかし、日本人学校という学校になった今、文化祭と言う行事に対し、テーマについての発表もしなければならなかった。日本の文化の祭りⅡ文化祭、というふうには捉えるだろう。よって、歴史ある日本の文化という

枠の中のテーマを求めて、僕らは様々な思考を巡らせた。そして、沈黙を破るようにして一人が言った。

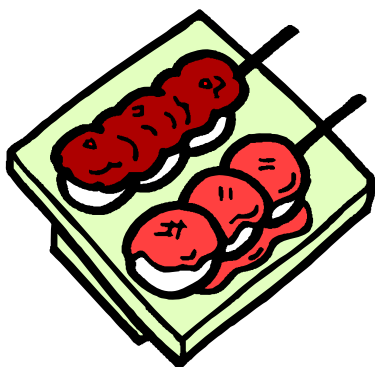
「団子」。団子は現代、皆に親しまれている和菓子の中でも極めて古い方だろう。そして、団子という題材をテーマにする事に決定した。正直な所、団子という食べものにあまり親しみのない自分。一からのスタートとなった。幸い、団子についてまとめる文章を作る係には回らなかった。そのため、のれんを作る事になった。団子屋にとってのれんは欠かせない物であり、人々もそう感じていると思う。生徒全員が別の役割を持ち、一つの目的に向かって取り組んだ。僕は始め、面倒くさく思っていたが、締め切りが近づくにつれて真剣みが増していった。それぞれ試行錯誤の中、何とか一週間で仕上げた。皆必死にやっただけあり、それらをディスプレイすると、教室が別の空間に感じられた。汗水たらす労働に

ないにせよ、準備を終えたということに少しながら、達成感を得た。

早めに準備していたのもつかの間、文化祭まであと一週間という日まできていた。さすがに一週間前となると学校中が慌しくなってきた。生徒全員がそれぞれ思いを込めながら文化祭の準備を各学年が進めた。

文化祭前日。僕の学年は、準備を一日延長し、団子作りに取り掛かった。始めのうちは、家事が経験不足な僕が、普段以上に不器用に見えた。物事の成り行きとして普通なのだが、次第に上手くなり、自称、達人級である。作っている最中、団子を文化祭にて客に食べてもらって、意外そうに、うまい、と言われる所を思い浮かべると、笑みがこぼれる。多少、問題が生じたが、団子作りはノルマを達成した。余談だが、団子は減っていくに連れ、おいしくなくなっていたといえる。

文化祭当日。練習、準備に費やし



た時間と苦勞のわりには文化祭はあ
っけなく幕を閉じた。しかし、文化
祭を終えた後の達成感がその物足り
なさを満たしてくれた。賞品より、
この満足感が僕へのプレゼントとな
った。物事を終えた後の達成感。そ
れはどんな喜びにも勝る喜びであろ
う。だが、それにたどり着くまでの
過程が最も大事だと僕は思う。

結果が全て。それはそれで一理あ
ると思う。しかし、その結果にたど
り着き、悔いのない結果を残す為に
は過程が何よりのことだと思おう。
過程なしでは、物事はうまくいかな
い。つまらなく感じる。ゴールとい
う名の結果に向けて、そこまでの道
のりをいかにするかが大事だと思う。
文化祭から痛感し、学んだ事。そ
れは、人間は死という名の結果に向
けて、人生という名の過程をどうい
う風にして一步一步、寄り道しなが
ら歩んでいくかということ。

文化祭

中二 山崎 勇祐

今回、僕は生まれて初めて文化祭
らしい文化祭を味わった。というの
も、こんなに忙しかったのが初めて
だったからだ。今まで補習校では下
級生で、自分達の出し物だけに集中
するだけでよかった。しかし、日本
人学校に来てからは、僕達中学二年
生が最上級学年。よって自動的に僕
達が生徒会員になることとなった。
毎回遊んでいたはずの昼休み、なの
に部屋に入って文化祭の段取りを決
めていく。嫌だった。大変だった。
けれど、日本の学校は当然人数が多
いのだから、今よりも大変になるの
かな」と思うと、生徒会は学校にと
ても大きな影響を与えるんだあと
思った。この学校では、一つのクラ
スでグループを作るような感覚なの
だけれど、日本では学校全体のとて
も大きなことなんだな、と思った。

ここでの生徒会員の文化祭へ向けての仕事はおもに三つだ。一つは開会式などを担当する、司会係。一つは、文化祭の垂れ幕を製作する垂れ幕係。そしてもう一つは、文化祭のパンフレットを作成するパンフレット係。三つのうち、僕は垂れ幕係に属することになる。僕は下書き、色塗り、仕上げなどを係りの人全員と協力しあいながら完成させていった。完成した垂れ幕を見てみると、見事に色塗りがされていて、手形やデザインも生きてくる。さすがにこれには多少なりとも達成感がでってくる。今思うとそんなにほめるほどのものでもないが、当時は苦労した後に見たのでよりいっそうきれいに見えてしまったのだろう。

さて学年ごとに出される出し物のことに話題を変えよう。学年ごとの出し物では、僕はハンガリーをベースとして劇の台本を作った。せりふはそんなに苦労はしなかった。た

だ演技力が全然だめだった。

そしてついに僕たちの努力が現れる文化祭当日だ。まずは垂れ幕だ。客の反応はまあまあだったというのでとりあえずほっとした。次に劇。台詞の度忘れなどはなかった。しかし、客の前で緊張した。

次はワークショップ。僕たちの団子屋は大盛況で、今までの失態も消え多少、自分を慰めることになった。

今思えば、これほど忙しい文化祭は初めてだったと思った。また生徒会役員は大変だと感じた文化祭だった。これは日本に帰ったときに大きな経験になるであろう。

事務職員募集

日本人学校では来年度から事務員として働ける方を募集しています。詳しくは日本人学校のホームページ(www.bjpjschool.hu)をご覧ください。

日本人学校からのお知らせ

左記の通り十八年度新入生保護者対象に説明会を行います。入学を予定されている保護者の方々は是非ご参加下さい。

日時 平成十八年一月二十九日(日)
十時～十二時

対象 平成十八年度に小学一年生に入学する児童の保護者

内容 学校説明及び一年生の教育や家庭へのお願いについて

連絡先 ブダペスト日本人学校
電話 三九二―〇三六〇
お問い合わせは日本人学校加茂教頭
までご連絡下さい。

E-mail : kamo@pandsl.hu

みどりの丘日本語補習校

学習発表会を終えて

知念 まり

二〇〇五年一二月一〇日、みどりの丘日本語補習校の学習発表会を開催しました。この発表会は、子どもたちの日頃の勉強の成果、また学校の様子などを皆様に知っていただくために企画したものです。当日は保護者、関係者の方々を初めとして、日本人学校の先生方、大使館の方にもお越し頂くことができ、大変活気溢れるものとなりました。

ご存知の方もいらっしゃると思いますが、この学校では毎週土曜日、三時間国語の授業を行っています。これだけの授業数で教科書を終えなければならぬので、学習発表会の準備のための時間は各クラス三時間

程度だったことと思います。それでもその少ない時間をフルに使い、集中して練習し、自分たちの持ち味を存分に発揮してくれました。

一年生は毎回二時間目を絵本の時間にしています。子どもたちはこの時間が大好きで、三時間の中で最も目が輝く時間だそうです。それぞれが自分の好きな絵本を持ちより、どんな本なのかを紹介し、読んでいます。発表会では、その自分の好きな絵本を絵と作文でみんなにも紹介してくれました。子どもたちが一人ずつ、自分の書いた作文を一生懸命読んでいる姿は、とても印象的でした。それぞれができる範囲内で、精一杯頑張っている様子が見て取れました。鶴見正夫さんの「雨のうた」という詩も、全員で声を合わせて暗唱してくれました。その瞬間、教室にも



本当に雨が降ってきたかのように、その場にいた人たちは子どもたちの可愛らしい声に惹き込まれてしまいました。

三年生は詩の暗唱と劇を行いました。大勢の人の前で、一人つきり

詩を暗唱することは、とても勇氣のあることだったと思いますが、三人とも立派にやり遂げてくれました。劇は、二期の最初に勉強した「三年とうげ」という物語を扱いました。劇と言えるほど大掛かりなものではなく、少ししぐさをつけて発表する程度でしたが、子どもたちは練習のときから存分に楽しんでいました。

小道具を作るときなど、「今までこれほど三人が結束して何かをしたことがあっただろうか」と思うほど、仲良く作業していました。それぞれが家で物語をしっかり読み込んで来てくれ、みんな暗記で言えるほどにまでなっており、子どもたちの記憶力の良さ、そして頑張りにはただただ驚かされるばかりでした。

四年生は「ひとつの花」という物語を紙人形劇にして発表しました。戦争を題材にしたお話でしたが、一年生にも分かりやすいよう、語り掛けるように演じてくれました。その

おかげで、いつもは元気一杯の一年生も、身動き一つせずじつくりと見入っていました。また授業で点字を勉強したつながりで、手話にも挑戦し、みんなをびっくりさせました。さらに、この学校の最高学年である四年生は、司会進行も担当し、全体を上手にまとめてくれました。

みどりの丘日本語補習校が開校されて早九ヶ月。最初は運営委員会も教員も手探り状態でしたが、徐々に落ち着いてきました。まだまだ問題もありますが、子どもたちのためにいい学校を作りたいという想いは共通しています。今回の学習発表会では、たくさんの方々に見ていただくことができ、子どもたちにとっては大きな励み、そして貴重な体験になったことと思います。関係者の方々に御礼申し上げると共に、今後とも暖かいご支援を承りたく、お願い申し上げます。



みどりの丘日本語補習校児童募集

二〇〇六年四月からの新入学児童を募集します。対象は二〇〇六年四月一日現在満六歳以上で、原則日本国籍を有するお子さんです。他国籍者は日本語で学年相当の授業が受けられると当校が判断した方に限ります。また中途入学も随時募集しております。

所在地：トウルクヴェース小学校内
(1025 Budapest, Torokvesz ut 67-69)

授業日・時間：毎週土曜日九～一二時
教科：国語（在外教育施設使用の教科書）
問い合わせ：hunjjuu-owner@yahoogroups.jp
06-30-549-0893（生徒募集担当：茂木和子）

総会・懇親会報告

昨年十二月四日に二〇〇五年度総会及び懇親会がインターコンチネンタルホテルにて、行われました。午後五時から四十五分ほど総会、六時より別室にて懇親会が盛大に執り行われました。総会は、稲川大使のご挨拶にて始まり、二〇〇五年度活動報告／会計報告、日本人会会則の一部改訂、二〇〇六年度役員選出が行われ、出席会員により、すべての議案が拍手により承認されました（改訂されました会則は別紙をご参照下さい）。

また商工部会幹事より、二〇〇五年度の活動の一環として行われました寄付についての報告がなされ、さらに、四月に開校されましたブダペスト日本人学校の現況につき、三代校長より報告が行われました。

二〇〇六年度理事は以下の通り。
理事長（会長）

伊藤和矢「丸紅・フジフィルムハンガリー」
副理事長

野田昌利「三井物産ブダペスト事務所」
理事

鷺埜廣一郎「SEWSハンガリー」
小林孝雄「ジェットロブダペスト事務所」
窪田豊和「在ハンガリー日本大使館」

懇親会には、前年より五〇名以上多い一七〇名の会員が参加されました。懇親会は稲川大使による乾杯の音頭で始まり、クラリネット五重奏を聴きながら、食事も、新会員の紹介、福引き大会と夜九時のお開きまで、アツという間の三時間だったように感じました。また、今回もキッズルームは大好評。予想を超える多くの子供達が、楽しく佐野友美さんと一時を過ごせたようです。そして今回も目玉は『年末大福引き大会』。商工部会及び各社のご協力で、数多くの景品が用意されました。

景品に関し多大なご協力を頂いた、

商工部会及び関係各社、福引き大会進行については、レジャー部理事及び分科会の皆様に、また、キッズルームの佐野友美さんとご主人に大変お世話になりましたこと、心より御礼申し上げます。

二〇〇五年度、当会の目標の一つでしたHP（www.nihonjinkai.hu）の立ち上げにつきましても、準備を進めてまいりました。レジャー部会が中心となり、日本人学校（特に飯川先生）の多大なご協力を頂き、年末ギリギリに、何とか立ち上げる事ができました（飯川先生本当にありがとうございました！）。

好評だった「ブダペスト生活マニュアル」をHPでどなたでも見て頂けるようにしています。当地に駐在・在留している邦人、これからハンガリーに来られる予定の方々のご参考になれば幸いです。皆様の忌憚の無いご意見を御寄せ頂けたら幸いです。

（事務局 酒井）